

待降節第2主日の説教

南雲 正晴 神父 2011年12月4日(日)

《待降節 ～迫り来る神をどのように迎えるか～》

私たちは今週、待降節の第二週に入りましたが、待降節にはどのような意味があるのでしょうか。キリスト教徒として、待降節をどのように過ごすべきか、簡単にお話しようと思います。

「待降節」の漢字は、「待つ」、「降りる」、そして「季節」を表します。

先週の第一主日から、教会は2012年度の新しいカレンダーを使うことになりました。このカレンダーの冒頭に来る新しい最初の1ページが、待降節になっているのです。日本語では、「何かが降って来るのを待つ」というようなニュアンスになっています。しかし、典礼のもともとの言語であるラテン語では「アドベントス(ADVENTUS)」と言い、「あるものが私の方に向かって迫って来る」というような意味です。より正確には、待降節にはそのニュアンスも入っていますが、それは非常に弱いのです。この出来ごとは、教会である私たちが霊的にも物理的にも準備をした結果、主が訪れる12月25日の喜びを迎えられるわけではありません。人間は、その出来ごとに対して主導権を持っていません。救いの主導権を持っているのは、神様とその一人子であるイエス・キリストだけです。

私はかつて5年近くこの教会にいましたが、その時には、よく山に登りました。山登りが好きで、日本アルプスもほとんど登りました。皆様の中にも山登りをされる方がいらっしゃると思いますが、『ご来光』という言葉がありますね。大変きれいな言葉です。「光りが来る」と言う意味です。待降節というのも、実はそのような意味なのです。「待ち望む」ものではなく、私たちがぼうっとしていても「迫ってくるもの」それを神の恵みと言うのです。それが分かるならば、私たちは一層待ち望む側、恵みを受ける側、恵みによって満たされる立場である自分を強く意識して、個人としても教会共同体としても、私たちのほうに向かっておいでくださるその方をどのように歓迎すればよいか、迎えばよいか、そういうことを心に置いて、それを意識することが待降節の本当の意味になります。

面白い話を紹介します。テレビやラジオで、「そろそろクリスマスが近づきますね」と流されるようになった数週間前のことです。12月に入ると、あちこちにクリスマスツリーなどが飾られ、目につくようになります。「クリスマスにサンタさんに手紙を書いてください」というテーマで、福島震災や原発事故などにより大きな苦しみを味わった被災地の小さい子ども達に、書いてもらいました。私は見に行きませんでした。東京でその手紙の展覧会がありました。その中の特に素晴らしいもののいくつか、ラジオで紹介されていて、それを聞きました。

ある一人の男の子は、「サンタさんは、本当は一人じゃないんだよ。弟がいるんだよ。その弟の名前はヨンタさんというの。」と手紙に書いています。子どもらしいものですね。私も「子どものイメージはすごい」と思いました。この手紙を読んで、私たちは笑える子どものあどけなさと思うでしょう。しかし、この手紙を書きつづった男の子がどういう子かよく調べてみますと、お友達や周りの人、親戚の人がみんな津波でいなくなってしまった、そういう痛手を心に持っている子なのです。それがこ

ういう形で表現されているというのはすごいですね。小さな、小さな心なのに、神様を真剣に受け止めようとしている、そこから出て来た一つの表現なのです。

また別の男の子は、お母さんに「わらはどこに行ったら買えるの？」と聞きました。お米のわらのことです。おかあさんは、「わらなんてどうするの？」と聞きました。実は去年は、寒い中サンタさんがプレゼントを持って来るのは大変だから、と思い、自分のお小遣いでカットケーキを1個買い、「これを食べて帰ってね」と準備していたのです。朝氣付いたらプレゼントだけが残っていて、準備したケーキはきれいになくなっていました。それで、「食べてくれたのだ」とすごく喜んだのだそうです。そこで今年はどうしようと考えたところ、サンタさんだけではトナカイが可哀そうだと思ったのです。だから、トナカイにもエサをあげたいと思い、わらをほしがったのです。表向きはそのように思われています。しかし実は、とれたお米を食べることが許されていない、そのわらを食べた牛も食用に使用できない、という現状に幼稚園の子どもも傷ついているのです。子どもの心にもそういう背景があるのです。

今年度は、今の話のように大人の私たちだけでなく、小さい子どもでも震えるほどの痛みを体験しました。私たちは信仰を持つ身として、外側の不幸を見るばかりでなく、心の中に本当の灯火である主をお迎えすることが必要でしょう。

実は、クリスマスが来るから主が来られるのではなくて、ミサを行う時に、同じ主が今も聖体の秘跡、食すことのできるパンの形として私たちを訪ねてくださるのです。私たちさえ転ばなければ、同じ主とミサのたびにいつも出会えるのです。その時も大切にしなければなりません。そういう意味で、心から祝うように致しましょう。